

第四章
空と大地の間で

早朝、船はデニアから出港した。船乗りたちの仕事の邪魔にならぬよう、トゥラスらは荷物の間でじっとしていた。

数日も船に揺られ、毎日まだかまだかとチユンオウに訪ねていたら、お前は子供かとりビに言われ、それから聞かないことにした。

第四章 空と大地の間で
チユンオウは相変わらず文献を調べるりビと何かを話している。退屈なのでヒョウビと昼寝をしていると、いつの間にか港に着いていた。

着いたかと思うと、荷物の引きだし作業が行われる前に早々に船を追いつき出されてしまった。チユンオウが船乗りたちに小さな包みを渡すと、彼らは喜んでいた。あれは煙草だ

ととりビが教えてくれた。

ヒェミチリアスの様子は、デニアとは大分

違っていた。港に市場はない。海沿いには、海岸と陸とを完全に隔ててしまふような壁がそそり立っていたのだ。壁は巨大な石が積み上がったできており、来るものを拒んでいようだった。

そそり立つ壁の間には、いくつか塔があった。交易を担っている建物らしく、役人らしき者たちが出入りしていた。

民の姿はなく、歩いているのは塔の物騒な役人たちだった。毛皮の着物に薄っぺらな金属の胸当てをしているだけだったが、見るからに屈強な身体はそれだけでも鎧だった。

チユンオウは采覇の商人、りビは旅の途中で雇った医者、トゥラスも旅の途中で雇った護衛と、それらしいごまかしで関所をくぐることになった。なぜそんな嘘をつくのかと聞くと、ヒェミチリアスの役人は国外の者に対

してとても厳しいという噂があるからだということだった。

噂通り、役人は疑い深い目でじろじろと観察した後、ヒョウビについて聞いてきた。すると、それが商品だとチュンオウは言った。あまり気持ちの良い嘘ではなかったが、仕方なかった。

しかしそんな複雑な気持ちも、開いた関所の扉の奥に広がる景色を目の当たりにすると、どこかへ消し飛んでしまった。

役人に促されて関所を抜けると、目の前には広大な土地が広がった。後ろで重たい扉の閉まる音がした。だがトゥラスの視線は、その大地から離せないでいた。

森羅万象の子
海のような、視界に収まらぬ広い大地。草が大地から離れるのを惜しむように、短い背丈でどこまでも続く。我が先にと天に向かう

森の木々と違う謙虚な草原だ。誰もが風になびき日光を受けられるようにと、長さはほぼ均一で、大きく吹かれれば大地にささやかな波を作る。

遠くまで続くのは草原だけではない。空もまた、視界に入りきらなくらい広い。こんなに大きな空は、船の上からしか見たことがなかった。

「海だ……」

思わず口からこぼれた。

「どこが海なんだ？」

リビが訝しげに聞いてきた。

「上も下も、全部だ」

天も地も、廣大。きっと両手を広げて自分の存在を誇示しようとも、この天と地は気づきもしないだろう。少し黄色の混じった緑のさざなみには、空に薄い雲があるのに影は落

ちていない。かなり遠くの雲が見えているのだ。海の潮風ではない、草と土の香りがする。これも一つの命のかたちだった。

リョウキの眼がはるか先を捉えている。彼は今にもこの草の大地で疾風になりたいと爛々と蹄を鳴らしたが、背の荷物がその心に少しばかりの影を落としていた。

第四章 空と大地の間で

申し訳ないと、チュンオウが彼のつややかな首を撫でた。こんなに荷物を増やしてしまったって悪かったと、トゥラスもリョウキに謝った。

広大な土地はどこまで歩いても広大だった。広過ぎて、いくら歩いても進んだ感覚が全くない。ただ、振りかえるところには地平線をなぞるように港の壁があって、その壁の大ききさを見ればどのくらいの距離を歩いたかはわかった。

海岸の壁もただの線のようにはしか見えなところまで来ると、草原の海に白くて丸い大きなものと、黒と白の点がいくつも見え始めた。

次第に黒と白の点が、牛と羊だということがわかった。草を食^はんでいる大きな角の牛に、白くて温かそうな毛をまとった羊。白い丸いものは、それらを飼う人々の家だった。

「この辺りは遊牧の民の土地であるのか」
チュンオウがつぶやいた。

天は美しい夕日で染められていた。広く伸びた雲が橙の光できらめき、空の端はもう夜を受け入れ始めている。

チュンオウは宿を求め、一番近くにある平たい円柱の白い家を目指した。

近くで見ると、その家は分厚い布でできて

いることがわかった。不思議な家もあるものだとトゥラスがまじまじと見ていると、家の裏から牛を引いた男が現れた。

「旅人か、珍しい。そろそろ日が暮れるが、宿と食事のあてはあるのかい？」

唐突に聞かれ、チュンオウも驚いたようだ。

「いや、ここには今日着いたばかりで、なんのあてもない。もしや、ここは宿屋であるのですか？」

髭を蓄えた男は大笑いした。

「こんな辺鄙なところに宿屋などあるわけがない。旅人は出会った者がもてなすのが常識だ。あてがないのなら、ここで食べて寝ていけばいい」

男が来いと手招きするので、トゥラスはリビと顔を見合わせて、男に案内されるチュンオウの後を追った。

男が牛を放したあたりにリヨウキを繋いで、ヒョウビもそこに寝そべった。二頭は草原がとても気に入ったようで、リヨウキは遠くを見つめ、ヒョウビは草の地面に体をこすりつけていた。

その二頭を置いて布の家に入ると、中は広々とした空間が広がっていた。端の方に小さなベッドが作られており、草原の床には美しい織物が敷かれている。

空間の中心は台所のように、大きな鍋がぐつぐつと美味しそうな音をたてていた。香りの良い湯気は真っすぐに立ち上り、屋根の真ん中に空いた穴から夕空に吸い込まれていた。

「あら、珍しい旅の方々。どこからいらしたのかしら」

鍋の番をしている帽子を被った女が、驚い

た様子で顔をあげた。

「ここには今日着いたばかりで、ついこの間はデニアにおりました」

チュンオウがそう言っている間に、男は三人の娘たちに敷物を持ってこいと言いつけていた。

まだ若く初々しい面立ちの娘たちは、珍しい旅人に騒ぎながら、鮮やかな色の敷物をきっちり三枚敷いてくれた。

トゥラスはフードから目を覗かせ、自分の敷物を敷いてくれた娘に「ありがとう」と言った。すると、娘は顔を真っ赤にして、すぐに顔を背けてしまった。何か悪いことでもしてしまったのかと心配したが、思い当たることはないのです、適当に思考は断つことにした。

男や彼の妻、娘たちの顔立ちは、なんとなくくりびや自分の系統に近かった。チュンオウ

とは違い、彫が深く眼や肌の色が少し薄い。

もしかしたら自分の親がこの辺りにいるのではないかというリビの予想は、的中してしまうのではないかと少し不安だった。

産みの親とばったり会ってしまったものなら、これまで築いてきた養母や兄弟たちとの生活が消されてしまう気がしたのだ。

しかし世界は広い。それは今しみじみと感じていることだ。だからそんな偶然はそうそう無いだろう。トゥラスはそう割り切ることにした。そしてチュンオウとリビに続いて、敷物に座った。

「旅は喉が渇くだろう。お前たち、ミルク茶を入れてあげなさい」

娘たちはすぐに小さな椀に何かを注ぐと、こちらに運んできてくれた。

先ほど顔を赤くしていた娘が、トゥラスの

分を持ってきた。ということは、怒らせたり困らせたりしたわけではないのだと、トゥラスはほっとして腕を受取った。

「ありがとう。これは旨いのか？」

それはクルミ色の液体だった。湯気の香りをかぐと、ミルクなのか茶なのかよくわからない。海水や酒のこともあるので、トゥラスはすぐに飲むのを躊躇した。

「美味しいですよ。今朝とれたミルクで煮たお茶ですから」

娘は八重歯を覗かせ、にっこりと笑った。恐る恐る一口飲むと、全身がじわりとあたたかくなった。次いでぽかぽかしてくる。少し苦味の利いたお茶を、ミルクが柔らかい舌触りにしていた。

「本当だ。旨いな」

そう言うと、トゥラスは一気に飲み干して

空の腕を娘に返した。

「まあ早い」

鍋を温めている女が笑った。

「ねえ、旅の方」

空の腕を両手に包んだ娘が、恥ずかしそうに言ってきた。

「もう家の中なのに、フードは外さないのですか？」

なかなか困った質問だ。

「悪いな。俺は光が苦手だね。鍋の火もあるし、まだ空の半分に太陽が出てる。こんなに明るいと目が痛いんだ」

「なんだ、そういうことは早く言ってくれ」
男は慌てて「火を弱めなさい」と妻に言い、女も慌てて火を小さくした。

「どうだい、これで大丈夫かい？」

男に問われ、トゥラスは「ましになった。」

ありがたい」と、感謝の言葉を添えた。
 「それじゃあ、フードを取って下さい。綺麗に置みますから」

ぱっと顔を明るくして、娘が言う。鍋の手伝いをしていた娘が「そんなに旅の方の顔が見たいのね」とひやかした。

トウラスは何のことかわからなかったが、そばの娘が「だってとても綺麗な目が見えたいんですもの」と顔を真っ赤にして必死に言っているの、次第に申し訳なくなってきた。それを見て男は大いに笑い、上機嫌に言った。

「フードの兄さんよ、フードを取ってやってくれんかね。二番目の娘は気難しくて婿探しに手を焼くかと思っていたんだが、こんな娘を見るのは初めてだ。どんな顔に惚れたのかわしにも見せてくれないか」

ここまで言われては、嫌だの一点張りはずきそうになかった。ミルク茶ももらったところだし、今晚はここに寝かせてもらうのだ。そもそももてなしてもらっているのに、顔を見せないのは悪い気がした。

旅を始めてからは日中に動くことが多くなったので、多少の光は我慢できるようになってきた。だから少しはいいかと、トウラスはフードを取ることにした。

「できるだけ光を浴びたくないんだ。だから顔を見せるだけで勘弁してくれ」

そう言って、トウラスはフードを脱いだ。刹那、横で爛々と目を輝かせていた娘が、大きな悲鳴をあげた。鍋の方にいた二人の娘も女も、腰を抜かして悲鳴をあげていた。

何が起こったのかわからず、トウラスは首をかしげた。チュンオウもリビも顔を見合わ

せた。

すると、男が立ち上がり、腰の剣を抜いてトゥラスに突きつけた。

「おまえ、隠していたのはそれだったのか！」
「おまえ、隠してはいたのはそれだったのか！」
「おまえ、隠してはいたのはそれだったのか！」
「おまえ、隠してはいたのはそれだったのか！」

「何か悪いことでもしたか……？」

おずおずと聞いてみたが、男は威嚇するよ
うに剣を振り上げた。

「忌まわしい白い悪魔め！ さっさとここ
から出ていけ！」

そうだった。すっかり忘れていた。この姿
のために自分は森に閉じ込められたのだ。

たかが髪の色でここまで言われることに
腹が立ったが、同時に心がざっくりと引き裂

かれた音が聞こえた。そこから冷たいものが
染み込み、反論する言葉さえ見つけられなか

森羅万象の子
った。

「トゥラス」

リビの声で我に返った。

荷物を抱えたチュンオウが、優しく背を押

した。

「行くぞ、トゥラス」

チュンオウに押されるまま、急いで外に出
た。「さっさと出ていけ！」と罵声を飛ばし、

男は炎をつけた松明を振りかざした。

火の粉はトゥラスに向けてまき散らされ
た。突然目の前を通り過ぎた強い光のせいで、

トゥラスの両目には激痛が走った。

「トゥラス、こっちだ」

リビが肩を押して、暗くなった外へ導いて
くれた。

「二度と来るな、この悪魔め！」

男はそう言い放つと、板で入口をふさいで
しまった。それからは静けさが戻った。いつ

の間にか太陽が沈んでいた外は、驚くほど冷たい風が這いまわっていた。ぞくりと、背筋が震えた。

「俺のせいで、ごめん」

「トゥラスよ、何も気にするでない」

まだ目がおかしくてよく見えなかったが、チュンオウが悲しい顔をしているのが声でわかった。

「そなたは何も悪くない」

心が壊れてしまいそうだった。一方的に罵倒されたのに、なぜ怒りではなく惨めさや悲しさが膨らむのだろう。なぜ怖ろしくてたまらないのだろう。

白い姿で生まれた自分は、悪魔の子とされ疎まれた。記憶のない赤子の頃、自分に向けられたこの暴力は、一体誰が受け止めた？ 誰がこの怖ろしい暴力の中から自分を救っ

てくれたというのか。

「ばあさん……」

森に追いやられるほどの言葉や暴力を、養母は自分の代わりに受け続けたに違いない。養母が受け止めなければ、自分はとっくに死んでいただろう。

食事を与えられなかったり、どこかの沼に沈められたり、殴られたり刺されたりしたって何も抵抗はできなかった。そんな自分の代わりに抵抗を続けてきたのは、森に逃がしてくれた養母だ。

「こんなものから俺を守ってくれていたのか……」

痛みの残る目が熱くなった。耳の形見に触れて、養母に心から感謝した。もう直接伝えられないことが悔やまれる。

「トゥラスよ、そなたはなんと強いのだ」

うっすらと目を開くと、ぼやけた視界にチ
ユンオウの顔が見えた。

「人を恨んでもおかしくはないこの時に、そ
なたを育てた養母を思い出し、感謝すること
ができるとは……。簡単にできるものではな
い。そのようなそなたが、悪魔であるはずは
ないのだよ」

チュンオウが皺の刻まれた手でトゥラス
の手を握った。肩にはずっとリビが手を添え
てくれている。

足元の温もりはヒョウビだ。心の奥に注が
れる温かい心は、リョウキの優しい励ましだ。

「はは！」

トゥラスはふっきるように笑った。目をこ
すって見上げれば、空には満天の星空が見え
た。

「俺らしくない！ 俺のことなんてこれっ

ぽっちも知らないやつが、どうして俺が悪魔
だなんて言えるんだ？ 俺のことを知って

いる爺さんやリビは、俺を一言もそんな風に
言ったことはない。ヒョウビやリョウキだっ
てそうだ。俺はそれを信じればいいんだ！」

トゥラスは草原を思い切り走って、そして
草原に飛び込むように寝転がった。仰向けに
なって、空気をいっぱい吸って、無垢に輝く
星空を眺めた。傍に寄り添うようにリョウキ
が横たわった。

星空が明日は晴れだと教えてくれている。
夜の冷たい風にそよぐ草は、朝になればすぐ
に温かい風が吹くと教えてくれている。

世界の大半を埋めつくしている自然たち
は、いつだって味方だ。

「トゥラス」

リビが傍らに立って、こちらを見下ろした。

「人の持ちえる言葉は、時にどんな刃やいばより鋭くなる」

トゥラスも、船でリビと話したことを思い出していた。

「……悪かったな。俺のせいで今日は野宿だ。

牛も羊も、草原の夜は寒いと言ってる」

トゥラスは身を起こして、ヒョウビを抱き寄せた。

「ヒョウビが、自分のそばで寝ろと言っている。ヒョウビは温かいから、そうさせてもらおう」

チュンオウに引かれてリョウキもやってきた。リョウキもトゥラスのそばで横になった。

「リョウキは風避けになってくれるらしい。ありがとう、リョウキ。ヒョウビもありがとう

う」

トゥラスはいつの間にか笑っている自分に気がついた。そしていつしか、心もふわりと温かくなっていた。

朝は寒かったが、太陽が昇るにつれて温かくなってきた。トゥラスはフードを目深にかぶり、草原を歩いた。

逃れるようにフードを被っている自分が情けなかった。光が苦手だということを利用して、こそこそ隠れているのを正当化しようとしているように思えてならないのだ。もし白い髪のまま光が苦手でなかったら、今この国でフードを外せるだろうか。

昨晚は慰めてくれる皆の心に奮い立ったが、空が明るくなると心細くなっていた。

この広い海のような大地で生活している遊牧の民は、きっと誰もが自分の姿を怖れ、軽蔑するだろう。旅を共にする二人と二頭は味方だが、たくさんいる人間の中でたった二人だけだと思うと、とても怖ろしかった。

気が減入って、光に抗ってやろうと空を仰いだが、目が痛くてたまらなくて、結局はフードに助けられた。

「どうした？」

第四章 空と大地の間で
歩みを止めたトゥラスに、リビが振り返った。

「何でもない」

トゥラスは再び歩み始めた。

高い木があまりない草原は、昼間は太陽が照りつけて暑い。しかし湿気がない乾いた風が吹くと、とても涼しくなった。ただ、やけに今日の風はきつかった。突風が吹く度に、

トゥラスはフードが飛ばされないように注意しなければならなかった。

夕方になるとどんどん冷えてきて、夜はまた冷えてくるぞと身構えた。この草原の国を過ぎるまで、風雨をしのぐ宿をとるのは難しいから、きっと過酷なたびになるのだろうなとトゥラスは察した。そして、そんな過酷な旅を強いてしまう原因となった自分を呪った。

遠くには、湯気の昇る白い布の家がある。羊飼いの男が、牛を引きながら声を響かせていた。草原の海に伸び伸びと響くその声は、犬を操る号令のようだった。茶色い犬が、羊たちを面白いほど上手に帰路に導いている。きっとあの男に宿を頼めば泊めてくれるのだろうが、チュンオウもリビも、男に気付いても歩みは止めなかった。

申し訳ないなと思いつつトゥラスもチュンオウらに続いて歩いていると、耳に届く男の声が、先ほどと様子が違うことに気がついた。

「おーい、おーい」

犬の号令は、呼びかける声に変わっていた。

「爺さん」

トゥラスは立ち止った。チュンオウもリビも足を止めたが、リビが言った。

「宿は無用だと伝えて参りましょう」

そうして男の方へ向かおうとしたリビを、

トゥラスは制した。

「いや、宿を頼もう。夜は冷える。爺さんは宿の方がいい。お前は爺さんに付き添え。俺はヒョウビと野宿でいい」

「トゥラス……」

そんなことを言っている間に、男はすぐ目

の前までできていた。驚いたことに、牛に跨っていたのだ。土埃を上げて突進する牛を、男は上手く操ってチュンオウの前に止めた。

「やあ、こんばんは。旅の方ですか？」

爽やかな声で、男はチュンオウ、リビ、ト

ゥラスを順に見て訊ねてきた。

青年とも呼べるまだ若い男は、黒い髪を後ろに束ねており、トゥラスと同系の顔立ちをしていた。彫が深く、眼鼻立ちがはっきりしている。その顔で、男は何の警戒も疑念もなくにこりと笑いかけてきた。

「旅の調子はどうです？ よければ旅の話をお聞かせてくださいませんか。この辺じゃ外の者は珍しい。話のお礼と言ってはなんですが、今晚は家に泊って下さい」

やはりこの国の者は穏和で友好的だ。相手が白い髪の者でなければの話だが。

悔しさを噛み殺しながら、トゥラスはリビやチュンオウの呼びかけにも振り返らずに走った。

「待ってくれ！」

牛の上の男が叫んだ。

「俺は作り話なんて信じやしない！ 君も

泊るといい！」

思いがけない言葉に、足が止まった。振り返ると、男が頭を垂れた。

「遊牧の仲間が酷いことをしたようだ……。私に免じてどうか許してやってくれないか」

逃げる理由も断る理由もなくなった。

男は太陽のように微笑んだ。本物の太陽は苦手だったが、この男の無垢な笑顔は別だった。冷たい刃で引き裂かれた心に、木漏れ日のような温かさが滲んだ。

トゥラスらは、やはり白い布の家の方へ案内された。屋根からは湯気が立ち上り、美味しそうな匂いが漂っている。

「旅路は腹が減るでしょう。丁度夕食の時間ですから、たんと食べて行って下さい」

羊たちが囲われている広い柵の中に牛を入れながら、男が言った。「その毛並みの良い彼も、こちらへどうぞ」と、チュンオウに促した。チュンオウはリョウキを柵の中へ入れながら男に訊ねた。

「夕食を一緒にいただいで、よろしいのですか？」

「もちろんです」

男は手織りの垂れ幕をくぐって、家の中に何か言うと、垂れ幕を上げたまま「どうぞ」とチュンオウとリビをくぐらせた。

トゥラスは、ヒョウビにリョウキと共に待っているよう言ってから、リビの後に続いて布の家に入った。

中は先日の家と似たようなものだった。ただ、織物の色合いや模様が違うので、雰囲気はずいぶんと違った。前の家は赤と黒が目立った織物だったが、ここは赤と黄色が鮮やかだった。

第四章 空と大地の間で

隅にベッドが据えてあり、真ん中に鍋が煮えていて、天上のぽっかり空いた穴に湯気が昇っているのは同じだった。

鍋を見ているのは男の妻だろうか。彼の娘と思われる幼い少女が、家族分に加えて小さな敷物を三つ敷いてくれた。

男が敷物に胡坐をかくと、寄ってきた幼い男児二人が男の膝へちよこんと腰を下ろした。

「そら、挨拶をしなさい。お客さんだよ」

子供らは物珍しそうにこちらを見ながら、「こんばんは」と言った。

チュンオウが「こんばんは。大きな声の元気な子だ」と笑うと、子供らも恥ずかしそうに笑った。

一番豪華な敷物には老人が座っていた。男は老人を「妻の祖父です」と紹介してくれた。

「そこに座って下さい」

男が言うので、チュンオウは「かたじけない」と座った。トゥラスに続いてリビも腰を下ろした。

「国外の旅人と夕食を囲めるだなんて、運がいい。ぜひ旅の面白い話を聞かせて下さい」

座るや否や、男が聞いてきた。名前も旅の経緯も聞かない。こういう人間もいるのかと、トゥラスは嬉しくなった。無暗に探りを入れ

たり名を求めたりしないのは、とても好感が持てた。彼の気さくな心は、まるでこの草原のようだ。トウラスは思った。森にいた頃を思い出す。

トウラスは、白い髪を受け入れてくれる遊牧の民に出会って、すっかり心も軽くなっていた。

「ここは気持ちの良い場所だな」

トウラスはチュンオウやリビの代わりに言った。彼らは無償のもてなしに慣れていないようで、一番くつろいでいるトウラスが男の会話に乗った。

「この外の世界じゃ、もてなしを受けたり何かするたびに名前が必要らしい。しかも自分が先に名乗らなきゃならいけねって規則まであるらしい」

「それは面倒だな！」

遊牧民の男は笑った。彼の妻から、トウラスは湯気の立つくるみ色の飲み物を受取った。多分ミルク茶だ。

「ここは俺のいたところに似てるよ。人間だけじゃないところがいい」

「そりゃよかった。気兼ねなく飲んで食べて寝てくといいい」

そこへ夕食が運ばれてきた。大きな椀に、豪快にゆで上がった肉が盛りつけられている。一人一つずつ配られ、トウラスは受取ると、首回りのフードを少し下げてすぐに汁を飲んだ。

「こりゃ何の肉だ？」

「羊だよ」

「へえ。食ったことないな。俺は兎とか鳥ばかりだったから。運が良ければ狼だったな」

「君は狼も狩るのかい！」

男がたまげて聞いてきたので、トゥラスは少し自慢げに言った。

「あっちから喧嘩を仕掛けてきた時はな。槍で何度も仕留めたぜ」

「槍か。俺たちは弓だな」

そのように男が言ってきたので、トゥラスも驚いた。

「ここにも狼が出るのか！」

「ああ。家畜を狙ってな。困ったもんだよ」

男はそれでも笑って、羊肉を頬張った。同じようにトゥラスも肉にかぶりついた。焼いたものと違って、ゆでると煮汁を吸い込んで汁の香が広がる。もちろん肉の味もよく、柔らかい。まだ若い羊なのだとトゥラスは推測した。

チュンオウとリビは、湯気を吹きながら食べていた。チュンオウは「こんな旨い肉は初

めて食べました」と言った。男も男の妻も、嬉しそうに笑った。

「狼ってのは、ここいらでも嫌われているのか？」

トゥラスが訪ねると、男は肩をすくめた。

「そりゃあな。手塩にかけて育てた家畜を食われたら、俺たちの食う物がなくなっちまう」

「じゃあ、襲われた時には、守るために戦うのか？」

「そうだな」

その答えにトゥラスはほっとした。自然に沿う目的の下に戦うのであれば、この土地はまだ闇というものにのまれていないのだろうと思った。だが、戦うということ、それ自体がトゥラスにとってわけのわからないことになっているのは確かだった。

戦うとは、何か。戦うということは傷つけ

る相手がいるということ。その相手が何であれば良いのか、何であれば悪いのか。その境界がさっぱりわからないのだが、生きるために狼と戦ってきた自分は、この男が狼を狩らねばならない理由もよくわかった。生きるに必要なことなのだ。多分、食べ物循環の一部だ。

「だが狼は気高い生き物だ」

男が言った。

「やつらは自由だ。俺たち人間に媚びることなく、養われることなく、この大地をたった一人で生き抜く精神と力を持っている。それは称えるに等しい。俺たちは狼を狩ったら、絶対に頭は食べない。埋めてやるんだ。花が咲いていたら、それも一緒に埋める」

感心した。森にいたときには喧嘩を売ってくると敵対していたが、確かに媚びる生き方

をするやつらではなかった。むしろ何にも心を許さぬ、強固な意思を持っているように感じた。獣の意思を理解できるトゥラスも、狼の心はなかなか汲み取れなかったのだ。

「確かに狼は媚びない眼をしているな。あいつら、俺がいくら話しかけたって聞き耳立てやしなかった。なるほどな、それを気高いとも言うのか」

「ああ。俺たちはそう考える」

男はそう言ったが、彼の妻は「でもやっぱり、狼は困ります」と言うので、トゥラスはそれもそうだと笑った。

「お伺いしますが、ヒェミチリアスは遊牧のホピネス族の国なのですか？」

ようやくリビが会話に入った。

「そうだ。ここ一帯はホピネス族が共有している」

「そうでしたか。遊牧が失われたとの噂も聞いたので、すっかりホピネスの民も農耕の文化となったのかと思っていました」

だがそこへ、静かに羊肉を食べていた老人が口を開いた。

「実際のところは、そうなりつつある」

羊肉の味の染みた汁をすすって、それからこう続けた。

「ホピネスは自由の民だった。この悠久の大地を、草を求めて移動する。どこが誰の土地でもなく、皆の土地。雨が降らねば降る場所を目指し、寒くなれば温かいところへ。この辺りはまだそういう暮らしをしているが、城の近くはそうではない」

闇のことだろうか。チュンオウが、ヒュミチリアスが戦を広げていると言っていたことと、何か関係があるのだろうか。

「それは何ゆえか、理由はご存じなのでですか？」

やはり、チュンオウが訪ねた。老人は頷きもせず、続けた。

「我ら遊牧の自由を手にするということは、立ち向かうべきものも増えるということ。自然は時に穏やかであり、時に荒々しくもある。その変化に挑める、勇気あり力ある者でなければ、自由な生き方は得られない。それを覚悟で、自由であり自然と共にいるのが我らホピネスの美德であった。だが、自由を捨てても安住を得たいとする者が現れ始めた」

その老人の息子であろう男も、静かに頷いて羊肉の椀を置いた。家の皆が、老人の話に耳を傾けた。

「わしがまだ生まれるいっくらか前の昔、ここを酷い干ばつが襲った。雨は降らずに草は枯

れ、冬の雪も少なく、家畜らは氷の湖から水分を得られずに死んだ。それからだ、農耕に生活を変えた者が現れたのは」

老人は大きく吐息をつく、続けた。

「彼らは気候の穏やかな土地に自分の土地を決め、そこに定住し、食糧を安定して得られる環境を築いた。それはいい。そういう生き方があってもいい。だが、その生き方は権力者を生み出した。遊牧の民は自由の民。束縛する権力者などいなかったし、土地も誰の物と決める必要はなかった。生きるには天候を読み、いつどこに移動するかを決める自分の判断を信じるのみで、他人の指導などいなかった。物欲も無かったし、豪華なものを求める心もなかった。移動するのに物が多いのは不便じゃからな」

この家を見ると、この老人の考えがよくわ

かる。布で家を造るのは、すぐに解体して、またどこにでも建て直せるようにとの工夫だろう。布ならば、畳んだり巻いたりすれば持ち運ぶのも便利だ。

床も造ったところで移動するのに不便なだけだから、きつとこうして敷物を敷いただけにしてあるのだ。

家具や物も、少ない方が好きな時に手軽に移動ができる。

「だが定住というのは、移動の必要がないからか、物をため込む性質を作った。その環境は物欲をかきたて、より多くの物を、より豪華な物をと求める心をつくったのだ。それは権力者を作り出すものとなった。豪華な物をたくさん身につけ、所有し、広大な土地を持つものがだんだん辺りを支配するようになって

った。それからだよ、ここがヒエミチリアスと呼ばれるようになったのは」

ある権力者がこの土地を自分の土地だと宣言し、国ができた。彼は土地を民に分け与える代わりに、権力の座を得た。その家系が、今のヒエミチリアスの王族だと言う。

「人間らしい話だ」

リビが、小さく呟いた。

この老人の悲しむところは、トゥラスには良くわかった。狩りで食糧を得なければならなかった森の生活は、時に死をも連想させるほどの自然の怖ろしさを、数え切れぬほどの身に叩きこんだ。しかしその生活は嫌いではなかった。

旅をして人間の生活を見るようになってから、森はなんと束縛のない世界だったのだろうかかと回想できる。時に命も脅かすような

荒れ狂う一面を持つ自然に立ち向かいながらも、共に生きるその暮らしを自由と表現する彼らに、トゥラスは共感できた。

「わしは王族を強欲の一族とっておる。周りに戦ばかり広げ、そんなに土地が欲しいのか。土地は神が生きるものへ平等に与えてくれた恵みだというのに……」

「あなたも、ヒエミチリアスの王族の振る舞いを御存じなのですね」

チュンオウが、嘆く老人に聞いた。老人の代わりに、男が言う。

「遊牧の民は自由の民と言うが、ヒエミチリアスでは武人の民とも言われている。俺たちは牛が移動手段で、牛がいないと生活が成り立たない。そういう生活だから、より強く猛々しい牛が俺たちの宝で、それを操れる男が一人前と認められるから、みんなこぞって